

# 北海道大会に参加するチームの遵守すべき事項 (2022 年度特別編)

(各支部事務局へ：本文は必ず全道大会代表チームに渡し、周知して下さい。)

北海道軟式野球連盟

## ※2022 年度一部修正(修正等箇所下線)及び新型コロナウイルス(以下「コロナ」という。)感染症予防対策に係る特別編

### I. 監督会議(学童・少年は監督・主将会議)について(開催の場合)

- 1 北海道大会に出場する代表チームは、監督会議に監督及び主将が必ず出席すること。ただし、一般チームにおいては、監督又は主将のどちらかが都合により出席出来ない場合は代理が認められる。(この場合、監督及び主将両方の代理は認められない) 少年部及び学童部並びに女子のチームについては、監督が都合より出席できない場合は、事前に登録しているコーチが代理で出席することが出来る。また、主将が特別な事由で出席できない場合はこの限りではない。なお、監督会議に出席しないチームは、原則として棄権とみなします。  
(全国大会では、一般チームは監督または主将のどちらかの1名の出席でよい。)  
監督会議への出席者は、試合で使用するユニフォームを必ず着用すること。なお、監督会議で説明又は決められた事項は、必ずチーム全員への周知を徹底すること

### II. 開会式について(開催の場合)

- 1 チームは、選手集合場所で支部代表旗をセットし、入場の際には、プラカードを先頭に、支部代表旗を持った主将(前年度優勝及び準優勝支部は、優勝旗及び準優勝杯を先に)に続き、背の低い順に1列若しくは2列で行進すること。(少年・学童・女子も同様)(具体的には開催地の指示に従うこと。ちなみに全国大会では2列になる。)
- 2 開会式には、全員ユニフォーム並びにスパイクで入場行進をすること。ただし、球場の芝保護の為にアップシューズ使用も認める。(この場合は通常の運動靴等は不可) また、ウインドブレーカー等の着用は禁止する。なお、高円宮賜杯学童(マック)大会におけるドナルド・マクドナルド・ハウス財団支援に係る「スマイルソックス」の着用チームの入場行進は認める。(18年度から実施済)
- 3 開会式には、登録選手全員の参加が望ましいが、最低でも10名以上参加すること。ただし、1回戦不戦勝のチームは2人以上でも可。ただし、前年度優勝及び準優勝支部はプラカードの保持、優勝旗(準)返還などを考慮して3名以上でなければならない。  
(全国大会では不戦勝のチームでも10名以上)
- 4 開会式は、大会の意義あるセレモニーであり、手を大きく振って「照れず」に元気よく行進すること。(事前にチームで行進の練習を行うことが望ましい。)
- 5 上記のほか、体育館等の「室内」で開催される場合は、開催地支部の指示に従うこと。

※ 2022 年度においても、原則「監督会議及び開会式」は開催しないが、開催する場合においては、開催支部の指示に従うこと。

### Ⅲ. 応援方法について

少年・学童・女子の大会における応援方法については、「相手投手が投球動作に入った時点で控える」など常識の範囲で節度ある応援に努めるよう周知徹底すること。

また、コロナ感染症予防に係るマスク着用や3密を避ける、「大声の声援やラッパなどの鳴り物による応援」を控えるなど、大会用感染症予防対策マニュアルを遵守すること。

### Ⅳ. 交通安全について

移動手段として自家用車等を利用する場合は、交通安全に心掛け、又、時間的な余裕をもって行動すること。

### Ⅴ. 傷害保険への加入について

国体では、大会実施要項により「傷害保険」への加入が義務付けられているが、他の全道大会においても、選手の怪我など、不測の事態に適切に対応できるよう、チームの責任において「損害保険」に加入するように努めること。（この保険は、チームの1年間の活動における事故・損害などの補償はもとより、他の損害を補償する「賠償責任保険」など内容も充実している。）  
なお、支部大会に關しての加入の義務付けや任意の判断は、所属支部に委ねることにします。

### 〔競技運営に関する取り決め事項〕

### ※以下の事項の他、2022年度も2020年度や2021年度と同様に開催地支部の指示に従い、コロナ感染症予防に関するマニュアル等を遵守すること。

- 1 大会期間中に監督または主将が欠場する場合、代理監督（主将）を指名しなければならない。  
この場合、打順表交換時に大会本部に申告し大会本部で準備した布（縦7cm、横4cmで監督は赤、主将は青）をユニフォームの左袖に付けること。
- 2 開会式直後の第1試合のチームは、開会式前に用具・装具をダッグアウトに入れ、開会式予定時刻の30分前に、大会本部が用意した打順表（登録された者の全員を記入したもの）を、主将が大会本部に提出し、登録原簿と照合を受けた後、球審立会いのもとに攻守を決定し、開会式終了後に試合開始予定時間を考慮しながらシートノックに入る。
- 3 開会式直後の、他球場での第1試合は、会場到着後直ちに攻守を決定し、試合開始予定時間を考慮しながらシートノックに入る。
- 4 各球場は、第1試合の試合開始予定時刻の90分前に開門する。
- 5 ベンチは、組合せ番号の若い方を一塁側とする。但し、ダブルヘッターで2試合続けて行う時はベンチの入れ替えをしないことがある。
- 6 チームは試合開始予定時刻の60分前までに必ず球場に到着し、試合に臨む準備を整えること。  
ただし、当日の試合の進み具合によっては試合開始が早まる場合もあるので、必ず試合の進行状況を確認すること。
- 7 第2日目以降の第1試合に出場のチームは、外野に限り練習に使用してもよい。その際、アップ用の服装でもよいが、打順表提出時には、全員ユニフォームに着替えること。

- 8 第2日目以降の第1試合に出場のチームは、前述1と同様に試合開始予定時刻の30分前までに攻守を決定し、直ちにシートノックに入る。態勢が整っているときは、試合開始予定時刻前でも試合を開始する。
- 9 第2試合以降は、9回戦では前の試合が5回終了時まで、7回戦では4回終了時まで、6回戦では2回終了時まで（それぞれの回に入ったら提出など、速やかな対応を心がけて下さい。）打順表を提出し攻守を決定し、前の試合の終了前にグラウンド入口に待機して、試合終了の挨拶中にグラウンドに入り、用具・装具をダッグアウトの外野側に置き、試合開始予定時刻に関係なく、シートノックに入り試合を開始する。

**※学童部（女子含む）の場合、健康を留意し、2022年度から全国大会及び北海道大会では6回戦若しくは1時間30分の時間制限が設けられました。（支部大会においては、周知期間を考慮し2022年度は猶予期間とします。）**

- 10 シートノックは**5分間**とする。ノッカーも選手と同じユニフォームを着用し、ユニフォームを着用していない者はグラウンドに出ることはできない。また、捕手はプロテクター、レガース、捕手用ヘルメット、ファウルカップを必ず着用すること。
- ※シートノック時の補助員は、安全上、全員ヘルメットを着用すること。（一般も同様です。）**  
少年・学童・女子では、登録されているコーチ（背番号28・29）が補助員として携わることを認める。また、試合開始までの間はコーチ1人のブルペン捕手を認める。（マスク着用）  
尚、別のコーチ等が外野手にノックすることは、可能になりました。
- 11 大会運営上、シートノックを行わずに試合を開始することもある。この場合は、攻守決定の際に知らせる。
- 12 次の試合に向けたグラウンド整備は、シートノック終了後に行う。
- 13 第2試合以降は、試合開始予定時刻前でも、前の試合が終了した後20分を目安に次の試合を開始する。（2022年度追加）
- 14 次の試合の先発バッテリーは、攻守決定後、球場内のブルペンを使用することできる。ただし、当該試合に支障のない状況での使用に限る。捕手は試合と同様の用具等を着用すること。
- 15 試合に出場する捕手は、プロテクター・レガース・フェイスマスク（スロートガード付）・捕手用ヘルメットのほか、ファウルカップを着用すること。また、投球練習時においても同様とする。ただし、フェイスマスクの着用をしない場合には立ってのキャッチボールとする。  
**なお、捕手・審判員用マスクは2020年度から「JSBB」マークのほかに「SG」マーク合格品であることが義務化されました。（道連は2022年度から実施）**
- 16 ベースコーチは、必ずヘルメットを着用すること。また、ベースコーチのウインドブレーカーの着用については雨天又は寒冷時に限り認める。ただし、一、三塁ベースコーチは同意匠とする。
- 17 サングラスは、大会本部の承認なしに使用できる。但し、投手は使用できない。また、開会式等での使用は認めない。**なお、少年及び学童並びに女子の大会においては、監督・コーチの使用は認めない。（2022年度追加）**

- 18 球場内ではトスバッティングのみ認め、フリー及びハーフバッティングは禁止する。また、サンドボールなどの用具の使用も禁止する。(2022 年度追加)
- 19 ベンチ内での電子機器類（携帯電話、パソコン等）及び携帯マイクの使用を禁ずるが、電子スコア記録用として 1 台の使用は認めます。また、指示用のメガホンはベンチ内に限り 1 個の使用を認める。
- 20 攻守交替時に、最後のボール保持者は、投手板にボールを置いてベンチに戻ることに。
- 21 雨天の場合でも試合を行うことがある。また、午前中見合わせて午後から行う場合もあるので、大会本部からの連絡に注意すること。なお、当日試合不可能な場合は大会本部から連絡する。
- 22 ベンチに入れる人員は、「一般」は、登録されユニフォームを着用した監督 30 番を含む選手 20 名以内（国体は 16 名以内）とチーム責任者、マネージャー、スコアラー、トレーナー等（有資格者）各 1 名とする。「少年部・学童部・女子中学」は、登録されユニフォームを着用した監督 30 番、コーチ 29 番・28 番及び選手 20 名以内（女子学童は 30 名以内）とチーム責任者、マネージャー、スコアラー、トレーナー（有資格者）各 1 名とする。ただし、監督、コーチは成人者でなければならない。なお、熱中症対策として、保護者 2 名以内をベンチに入れることができる。**【この適用については、大会本部が判断し、所定のビブスを着用すること。】**また、「マスターズ」は、登録されたユニフォームを着用した監督 30 番（専任）、選手 20 名以内とチーム代表者、マネージャー、スコアラー、トレーナー等（有資格者）各 1 名とする。ただし、監督、マネージャー、スコアラーが選手を兼ねる場合には、登録選手として 20 名以内の範囲とする。「全日本シニア」は、登録されユニフォームを着用した監督 30 番を含む選手 20 名以内とチーム代表者、マネージャー、スコアラー、トレーナー（有資格者）各 1 名とする。ただし、監督、マネージャー、スコアラーが選手を兼ねる場合には、選手登録 20 名以内とする。
- 23 少年部、学童部、女子でも監督に限り「一般」と同様、グラウンドに出て指示などをすることができる。また、試合中にベンチに入ることが許されたメンバーであれば、ベンチ内においては誰がサインを出してもよい。
- 24 夏季の学童大会等では、炎天下の中、守備時間が長い場合（概ね 20 分）に健康維持を考慮し、審判員の判断で給水タイムを設けることができる。（この場合において試合時間には含めない。）
- 25 試合中の禁止事項【必携 P57～58 抜粋】**
- ① マスコットバットを次打者席に持ち込むことはよいが、プレイの状況に注意し、適切な処置をすること。なお、競技場での素振り用パイプ及びリングの使用を禁止する。
  - ② 投手が手首にリストバンド、サポーター等を使用することは禁止する。なお、負傷で包帯等を巻く必要がある場合は球審に申し出し、承認を得ること。
  - ③ プレーヤーが塁上に腰を下ろすことは禁止する。
  - ④ 競技場内（ベンチ内を含む）では、喫煙及びガム等を噛むことを禁止する。
  - ⑤ 捕手の後方で投球を見たり、素振りや待機することを禁止する。待機場所は次打者席。
  - ⑥ 試合が開始されたら、控え選手は試合に出場する準備をしている者のほかは、ベンチ内にいなければならない。
  - ⑦ 次打者席では、投手が投球姿勢に入ったら素振りをしてはならない。投手も必ず次打者席に入ること。（5.10k【注 1】）
  - ⑧ トラブルの際、審判員や相手側プレーヤーへの暴力行為は厳禁する。万一このような事態が生じた場合は、退場を命ずるほか、以降の出場停止やチームへのペナルティを科す。
  - ⑨ 選手や審判員に対する聞き苦しい「ヤジ」は厳禁する。また、スタンドからの応援団の「ヤジ」及び目に余る行為はチームの責任とする。

## 26 試合のスピード化に関する事項【必携 P58～61 抜粋】

- ① 監督、コーチのマウンドへの行き帰りは、小走りでスピーディーに行う。
- ② 代打または代走の通告は、氏名と共に「代打者」又は「代走者」の背番号を球審に見せその旨を告げることとし、球審も放送席に向かって選手の背番号を見せて、「代打または代走」と告げる。
- ③ 投手と捕手について、無用なけん制が度を過ぎると審判員が判断したら、遅延行為として投手にボークを課することがある。
- ④ 内野手間のボール回しは1回りとする。(状況によって中止することもある。)
- ⑤ 打者が二塁打を打ち打撃用手袋から走塁用手袋に替える為のタイムをかける行為を禁止する。
- ⑥ 本塁打の走者を迎える場合は、ベンチ前のみとする。(3.03c【注】)

## 27 マナーや用具・装具に関する事項【必携 P62～64 抜粋】

- ① 監督が季節や天候により、グラウンドコート着用している場合にアピールや選手交代などをするときは、その身分を明らかにする(背番号の確認)ために、コートを脱いで申し出ること。
- ② ネックウォーマーは季節を考慮し着用することが出来る。(色は自由)
- ③ 試合に出場する捕手は、安全の為プロテクター、レガーズ、マスク(スロットガード付)、捕手用ヘルメット、ファウルカップを着用すること。なお、捕手用ヘルメットとマスクの一体製品は使用を禁止する。また、打者・次打者・走者及びベースコーチは必ずヘルメットを着用のこと。(この場合、ベースコーチを除き、いずれも公認された両側か片側にイヤフラップの付いたもの)
- ④ 用具・装具の点検時に、不良品を発見した場合は、試合終了時まで本部預かりとする。
- ⑤ スパイクの色は自由とし、全員同色でなくても構わない。学童部は金属製金具のついたスパイクを使用することはできない。
- ⑥ 少年部・学童部・女子の監督・コーチ及び選手について、ストレートパンツは認めない。

## 28 その他

- ① 1日2試合(ダブルヘッダー)まで行うことができる。継続して行う場合は、前の試合終了後、一般は**30分**を、学童・少年は**45分**を目安に開始する。(全国大会は全て30分以内)
- ② 試合中に雷が発生した場合は、状況を判断し、試合を中断して全員安全な場所に避難させ、气象台等の状況を掌握し、その後の処置を行う。
- ③ 試合中、プレーヤーの人命にかかわるような事態が発生した場合、人命尊重を第一に、プレイの進行中であっても、審判員の判断でタイムを宣言することができる。この際、その宣告によってボールデッドとならなかったらプレイにどのようなになったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。
- ④ 打者が頭部にヒットバイピッチ(死球)を受けた時には、球審は直ちに攻撃側監督と協議し臨時代走の処置を行うことができる。また、塁上の走者が負傷し、一時走者を代えないと中断が長引くと判断したときは、臨時代走の措置を行うことができる。
- ⑤ 少年部・学童部(女子も含む)チームの試合後の大会本部への挨拶は不要です。(応援団への挨拶は奨励します。)

## 〔競技に関する特別規則〕

### 1 正式試合

- ① 「一般」は、**9回戦**。(マスターズ・シニアは7回戦とし、指名打者制を採用) また「少年部(女子含む)」は**7回戦**とし、「学童部(女子含む)」は**6回戦**(4年生以下の大会は**5回戦**)とする。(2022年度修正)
- ② 正式試合(降雨・日没コールドゲーム)になる回数は、9回戦の場合7回とし、7回戦の場合

は5回とする。

※6回戦の場合において、試合開始以降1時間30分経過後の均等回完了をもってゲームは終了する。この場合のゲームは、5回及び制限時間経過の先に到達して方で試合を決する。

- ③ 得点差によるコールドゲーム（決勝戦も適用）は、9回戦の場合は5回終了時以降10点差、7回終了時以降7点差とし、7回戦および「少年部」・「学童部」・「女子」は、5回終了時以降7点差とする。（全国大会でも得点差によるコールドゲームを採用し、一般「9回戦」のすべての大会に適用（7回以降7点差）。

## 2 延長戦

- ① 「一般」は、9回を完了して同点の場合は、最長12回まで延長戦を続け、なお同点の場合は13回からタイブレーク方式【無死1・2塁、継続打順】に入る。この場合、勝敗が決するまでタイブレーク方式を続ける。ただし、試合開始後、3時間を経過した場合は、新しい延長イニングに入らず、直ちにタイブレーク方式を行う。
- ② マスターズ及び全日本シニアは、7回を終了して同点の場合は、最長9回まで延長戦を行い、なお同点の場合は10回からタイブレーク方式を行う。なお、試合開始後、2時間30分を経過した場合は、新しいイニングに入らず、直ちにタイブレーク方式を行う。
- ③ 「少年部（女子含む）」は、7回終了して同点の場合は、直ちにタイブレーク方式を行い、2イニングを完了しても決着がつかないときは抽選で勝敗を決する。ただし、決勝戦の場合においては、投手の投球制限を遵守の上、勝敗が決するまでタイブレーク方式を行う。また、健康維持を考慮し、試合開始後2時間30分を経過した場合は、新しいイニングに入らず、均等回の得点をもって勝敗を決する。なお、同点の場合は抽選で勝敗を決する。
- ④ 「学童部（女子含む）」は、6回を終了又は試合開始後1時間30分経過後の均等回完了時に同点の場合は直ちにタイブレーク方式を行い、2イニングを完了しても決着がつかないときは抽選で勝敗を決する。（2022年度少年部と学童部の取り扱いを分離・修正）

注1) 少年部（女子含む）に関して“試合開始後、2時間30分の「試合開始後」及び「均等回の得点を持って勝敗を決する」は道連の規定として運用します。

全国大会での2時間30分の制限は5回終了後、2時間30分を経過した場合と解釈。

注2) 2020年度より「抽選で勝敗を決する場合」は道大会及び地区大会等のみの適用。

## 3 「少年部・学童部・女子」の投球制限について

投手の投球制限については、肘・肩の障害防止を考慮し、投球数を次の通り制限する。

学童部は1日70球以内（4年生以下60球以内）、少年部は100球以内（1週間では350球以内）とする。ただし、試合中規定投球数に達した場合は、その打者の打撃を完了するまで投球できる。（この投球制限は選手が安全に安心して健康で野球を楽しむことを目的としていることから、学童は20年度から、少年は21年度から適用）

## 4 マスターズ及び全日本シニアは『指名打者ルール』を採用できる。（規則5.11）

- 5 抗議権を有する者は、「一般」は、監督・主将・当該プレーヤーのうち1名、「少年部」・「学童部」・「女子」は監督か当該プレーヤー。
- 6 規則5.10d【原注】の「同一イニングでは、投手が一度ある守備位置についたら、再び投手となる以外他の守備位置に移ることはできないし、投手に戻ってから投手以外の守備位置に移ることもできない。」は適用しない。
- 7 スピード化を図るため、プレーヤーが負傷などで治療が長引く場合は、相手チームに伝え、試合に出ている9人の中から代走（＝コーティシーランナー、打順の前位の者、ただし投手を除く。）を認めて試合を進行させる。

## 8 監督またはコーチが投手の所へ行く回数の制限

- ① 監督またはコーチ（少年部・学童部は監督に限る）が、1試合に投手の所へ行ける回数は3

回以内とする。なお、延長戦（タイブレーク方式も含む）は、1 イニングに1 回行くことができる。

- ② 監督またはコーチ等が同一イニングに同一投手の所へ2 度目に行くか、行ったとみなされた場合（伝令を使うか、捕手または他の野手に指示を与えて直接投手のところへ行かせた場合）は、投手は自動的に交代しなければならない。この場合、交代した投手が他の守備位置につくことが許される。なお、他の守備位置についたときは、同一イニングには再び投手に戻れない。（5. 10d）

## 9 守備側のタイムの回数制限

- ・捕手または内野手が、1 試合に投手の所へ行ける回数を3 回以内とする。なお、延長戦（タイブレーク方式も含む）となった場合は、1 イニングに1 回行くことができる。野手（捕手も含む）が投手の所へ行った場合、そこに監督またはコーチ等が行けば、双方1 回として数える。逆の場合も同様とするが、投手交代の場合は、監督またはコーチのみ回数には含まない。
- ・監督またはコーチ等がプレーヤーとして出場している場合は、投手のところに行けば野手としての1 度と数えるが、協議があまり長引けば、監督またはコーチ等が投手の所へ1 度行ったこととし、通告する。
- ・攻撃側のタイム中に守備側は指示を与えることができるが、攻撃側のタイムより長引けば、守備側の1 回とカウントされる。

## 10 攻撃側のタイムの回数制限

- ・攻撃側のタイムは、1 試合に3 回以内とする。なお、延長戦（タイブレーク方式も含む）は、2 イニングに1 回とする。
- ・守備側のタイム中に攻撃側は指示を与えることができるが、守備側のタイムより長引けば、攻撃側の1 回とカウントされる。

## 11 タイムは1 分以内を限度とする。

## 12 競技者のマナーに関する事項

マナーアップとフェアプレイの両面から、次のような行為を禁止する。

- ・捕手が投球を受けたとき意図的にボールをストライクに見せようとミットを動かす行為
- ・捕手が自分でストライク・ボールを判定するかのように、球審がコールする前にすぐミットを動かし返球態勢に入る行為
- ・球審のボールの宣告にあたかも抗議するかのように、しばらくミットをその場に置いておく行為
- ・打者がヒジ当てを利用してのヒット・パイ・ピッチ（死球）狙いの行為
- ・打者がインコースの投球を避ける動きをしながら当たりにゆく行為
- ・プレイ中みだりにベンチを出る行為
- ・野手が走者の視界を遮る行為（6. 01 h 【2】）
  - \* 走者がタッグアップしているとき、野手が走者の前に立ち視界を遮る行為
  - \* 野手が走者の前に立ち、ボールを保持している投手板上の投手への視界を遮る行為
  - \* 相手選手を威嚇する行為、プレイを利用して相手選手を欺く行為
  - \* 投手が投球動作を開始したら投手の動揺を誘うような声を発しない

## 13 規則適用上の解釈

- ・投手の投球当時とは、投手が投球動作を開始した時をいう。  
セットポジションの際のストレッチは投球動作とはみなさない。
- ・悪送球が野手の手を離れたときの走者の位置について（規則 5. 06 b 【4】 G 関連）
- ・1 アウト走者一・二塁で、二塁走者がけん制で二・三塁間においてランダンプレイになった。その間、一塁走者は二塁に達していた。その後、ランダンプレイもにおいて二塁手が三塁に悪送球してボールデットの箇所に入ってしまった。悪送球が野手の手から離れたとき、二・三塁間には二人の走者がいた。このような場合は「各走者がその時に位置していたところ」との解釈から、一

- 塁走者には二塁から2個の塁、すなわち本塁までの進塁を認める。
- ・対象走者以外に対するけん制球について（規則6.02a【4】【8】）
  - ・1アウト走者二・三塁、野手は前進守備、投手は投手板上から三塁にけん制球を投げた。三塁手は、一歩前に出てその送球を捕って素早く二塁に送球し、二塁走者をアウトにした。三塁手に三塁走者をアウトにしようとする行為も見られず、ましてや、三塁手も一歩前に出たということで「ボーク」が宣告される。
- 14 試合中、ベンチ前のキャッチボールは禁止するが、ブルペンでのキャッチボールは2組4名以内を認める。
- 15 全道大会優勝若しくは準優勝し、北海道代表となったチームは、ユニフォームの左袖に「北海道」（ローマ字も可）のマークを入れることになることから、支部代表チームは、予めマークを入れておくこと。  
また、本国体に出場するチームは胸マークを「北海道」（ローマ字も可）としなければならない。
- 16 背番号は、監督30番、コーチ29番と28番、主将を10番とし、選手は0番から99番とする。
- 17 既に試合に出場している投手がイニングの初めにファウルラインを超えてしまえば」とあるのを「投球練習するために投手板に位置してしまえば」に読み替える【5.10i 関係17年追加解釈】
- 18 監督又はコーチがマウンドに行く回数のカウントの仕方は、①監督又はコーチがファウルラインを越えて投手のもと（マウンド）へ行った場合は必ず1回に数える（ただし投手交代の場合を除く）、②球審（審判員）は、監督又はコーチに投手のもと（マウンド）へ行った回数を知らせる場合に限る。【5.10l 関連】
- 19 ボールは、一般と中学がM号（メジャー）、学童がJ号（ジュニア）を使用する。
- 20 故意四球は守備側の監督の宣言によって成立し、ボールデッドで行う。
- 21 支部代表チームをはじめ、道連登録全チームは、道連及び支部におけるコンプライアンス指針等の主旨を充分理解し、健全で楽しい軟式野球の普及に努めること。
- 22 2022年度からの全道大会申込書については、紙面の他、データー提出も可とし、この場合どちらも「支部長印」も不要とします。詳しくは、各大会要項等を参照下さい。